

編 集 後 記

今年の梅雨明けは各地で史上最も早い記録を更新し、梅雨明け後には6月にも関わらず各地で35度を超える猛暑日が1週間以上も続きました。そして、今は3年ぶりに現地開催されようとしている第58回小児循環器学会総会・学術集会の直前になります。COVID-19の第7波の流行が懸念されていますが、これまで画面越しにしか会うことのできなかった方々と久々に対面で会い、情報交換できることを心待ちにしていらっしゃる先生も少なくないのではないでしょうか。

さて、今回の38-2号では胎児から成人先天性心疾患まで、多領域からの投稿を含めて多岐にわたる論文が掲載されています。先天性心疾患の患者にかかわる一医師としては一人の患者さんの人生のうちのごく一部、長くても数十年しかかかわることができないわけですが、同一疾患の胎児期から老年期に至る方までを診ていると日々ご本人やご家族からの思いを聞くことで多くのことを考えさせられます。医師として予後を見据えた最適な治療を提供することは当然ですが、その時々境遇や思いに応えられるように広い知識や対応力を持つ医療者でもありたいと思う日々です。今回のような多方面からの発信は日本人の生活スタイルや考え方、社会制度の違いも関係してくることから諸外国のデータを当てはめて議論することが難しい場合もあると思います。こうした分野からの情報発信は日本語の学会雑誌の果たす一つの役割になっていると思いますので、今後も多種多様な研究が投稿されることを期待しています。

(島田衣里子)